

# 教育学部

## 2016年度 教育学部点検・評価報告書 (「学習成果の可視化」に向けた取り組み)

2017. 2.28

### (1) 現状の説明

教育学部は教育学科と児童教育学科という性質の異なる 2 つの学科を有しており、教育学、心理学、教科教育等のさまざまな分野の授業科目を開設しているため、学習成果の現れ方も多岐にわたっている。そのような状況のもと、「学習成果の可視化」の現状をまとめると、以下のようなになるであろう。

- シラバスの「到達目標」はすべての科目について整備され、学生に周知されている。  
(根拠資料 1-1 「2015 年度最終報告」にて報告済みのため本報告では触れない。)
- 学部教育のラーニング・アウトカムズは整備され、公表されている。
- 個々の授業科目にラーニング・アウトカムズを対応させるカリキュラム・マップは作成されたが、周知されたとは言えない。
- 「学生生活調査」が実施され、学生たちの学習に対する認識は把握されてきている。

本報告書ではこれらの項目について取り上げ、点検・評価を行うとともに、来年度以降の改善へとつなげていきたい。

また、本学が採択された「大学教育再生加速プログラム」(AP 事業) について、教育学部でも 2016 年度から取り組みがスタートし、学部長を中心とする学部 AP 推進チームを組織したほか、数名の教員が積極的に研修を受けて AL マスターとなり、AP 事業を推進している。2017 年度からは全学部授業で本格的に取り組むを進め、相互評価やアセスメントを通して学習成果の把握を強化することになっている。

### (2) 点検・評価

#### 1) 効果が上がっている事項

##### ①ラーニング・アウトカムズの改定・修正

2015 年 3 月 23 日の教育学部教授会にてラーニング・アウトカムズを改定し、4 分類 12 項目にわたって学生が身につけるべき能力をきめ細かく規定した。ラーニング・アウトカムズは、2016 年度には学部 3 ポリシー (ディプロマ、カリキュラム、アドミッション) の見直し作業を行う中でさらに若干修正され、ディプロマ・ポリシーに含まれる形で公表された。

単に学習到達目標としてのラーニング・アウトカムズというだけでなく、学部の理念・目的や教育目標と関連して、学位授与条件として位置づけることにより、その内容や意味がより一層明確になった (根拠資料 2-1 「教育学部 3 ポリシー」)。改定・修正された最新のラーニング・アウトカムズを以下に示す。

#### 知識・理解

1. 教育学と心理学に関する基本的な知識を修得する。
2. 教育学と心理学の研究方法を理解する。
3. 世界 (経済、政治、倫理、宗教、自然、芸術、身体、そしてところ) の諸問題を理解

し、そこに教育問題・課題を捉えることができる。

#### 考える力

4. 世界と自己自身の間を結びつけながら、反省的に思考する。
5. 世界の諸問題を教育的または心理学的な観点から分析的に思考する。
6. 世界の諸問題の解決を教育実践または臨床実践としてデザインする意味で、構想的に思考する。

#### 行為する力

7. 教育学と心理学の研究方法を対象と目的に応じて適切に利用できる。
8. 世界の諸問題に対する教育実践上あるいは臨床実践上の解決を見出し、それに取り組むことができる。
9. 教育実践または臨床実践に、同僚性のなかでリーダーシップを発揮しながら取り組むことができる。

#### 態度

10. 自他とのコミュニケーションを通して、絶えることない自己成長を追求する態度を持つ。
11. 価値に対する謙虚さを自覚しなければならないという意味で、教育的な倫理性を持つ。
12. 他者の主体性を尊重しながら、その成長を支え促そうとする教育的な責任感を持つ。

### ②カリキュラム・マップの作成

2016年度は、2014年度から始まった新カリキュラムが3年目を迎えてある程度の評価が可能になるとともに、その評価を踏まえて2018年度から始まる予定の新カリキュラムを作成した年でもあった。

そうした過程の中で、各科目にラーニング・アウトカムズの項目を当てはめるカリキュラム・マップの作成を本格的に行い、授業の履修を通して学生たちが身につけていく能力の可視化を進めた。2018年度カリキュラムにおいては、スタート時点からカリキュラム・マップを提示することにより、カリキュラム全体がラーニング・アウトカムズから見て十分なものであるか確認できるようにすると同時に、学生自身が学習を通して身につけた力を可視化して、自らの学習に役立てることができるようにしたい。(根拠資料2-2「教育学部カリキュラム」)

### ③「学部学生生活調査」のデータの蓄積

2014年度から学部生全員を対象に、学年別の「学生調査」を行っている。これは全員を対象とするアンケート調査で、前期と後期の初めに、これまでの学習活動を振り返りつつ、それに加えて生活面や将来のビジョン等についても答えてもらう設問を設けている。この学生調査のデータがかなり蓄積されてきて、経年変化について分析することが、ある程度可能となった。例えば2016年度後期の調査では、「分からない単語や用語は調べる」などの基礎的な学習方略について、ここ数年の入学生において徐々に定着度が上がっていることが示された。またこのデータは今のところ量的調査にとどまっているが、協力を申し出てく

れた学生たちを対象に、より深い分析を求めて質的調査も行いつつある。(根拠資料 2-3 「学生調査項目」、2-4 「前期回答の分析」、2-5 「後期回答の分析」)

## 2) 改善すべき事項

昨年度の報告では児童教育学科のカリキュラム・マップ作成が困難であると述べたが、今年度は両学科に対してカリキュラム・マップを作成した。しかしながら、マップを活用したカリキュラム全体の点検や、各教科の成績をマップに当てはめて、ラーニング・アウトカムズごとの学習成果を可視化するという本来の活用にまでは至らなかった。

来年度はカリキュラム・マップの活用を図ることによって、その妥当性を検証するとともに、学生の学習活動の活性化にも寄与できるようにしていきたい。

### (3) 将来に向けた発展方策

#### 1) 効果が上がっている事項

#### ③「学部学生生活調査」結果の分析と活用

上記のように、「学生生活調査」の結果から、いくつかの傾向を読み取ることができるようになったが、これをさらに精密に分析するため、インタビューを通じた質的調査も試みてきている。こうした詳細な調査を通してアンケートの精度を高め、将来的には、量的調査において問題傾向が見られた学生に、よりきめ細かい指導を行うような活用の仕方を考えたい。

また、この調査は個々の科目内容の理解を問うような性格のものではないので、学習活動については全体的な把握しかできていないが、学生たちに内在する様々な傾向性を分析することにより、今後の効果的な学習指導やキャリア指導に役立てていきたい。

## 2) 改善すべき事項

#### ②カリキュラム・マップの活用

カリキュラム・マップについては前項でも述べたが、今後は HP 上に公開するなど学生にも周知させ、活用を図りたい。例えばラーニング・アウトカムズの項目ごとに修得単位数を表示したり、GPA を表示したりすることにより、学生が数値的に自らの学習活動を自己評価し、弱点を見つけて積極的に改善・克服するなどの具体的な努力ができるようにしたい。

### (4) 根拠資料

- 1-1 「2015 年度最終報告」
- 2-1 「教育学部 3 ポリシー」
- 2-2 「教育学部カリキュラム」
- 2-3 「学生調査項目」
- 2-4 「前期回答の分析」
- 2-5 「後期回答の分析」